

機関番号：10101

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520152

研究課題名 (和文) 1960年代日本における文学概念の変容についての総合的研究

研究課題名 (英文) A Comprehensive Study of the Transformation of Literary Concepts in 1960s Japan

研究代表者

押野 武志 (OSHINO TAKESHI)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：70270030

研究成果の概要 (和文)：日本の 1960 年代において、文学概念の再編が社会的・思想的・政治的な諸言説と重層的に干渉し合いながら、どのように行われたのかを総合的に究明した。純文学／大衆文学、カルチャー／サブカルチャー、文学／政治、事実／虚構といった 1960 年代の文学をめぐる新たな境界の生成を 1930 年代前後の諸言説と対照させながら、60 年代の文学が何を構造的に反復していたのかという、戦前と戦後を貫く近代日本の知的言説の歴史的特質も明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：In this research, we have undertaken a comprehensive investigation in order to show how literature in 1960s Japan was reconfigured within the multi-layered social, intellectual and political discourses of the time. Competing ideologies and concepts – pure literature/mass literature, culture/subculture, literature/politics, fact/fiction – generated new literary boundaries in the 1960s. We compare these concepts with multiple discourses from the late 1920s through the early 1940s to determine what elements are structurally reiterated in 1960s literature, thereby revealing the particular features of modern Japanese historical and intellectual discourses that span the pre- and post-WWII periods.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：日本近代文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：国文学・思想史・サブカルチャー・メディア・1960年代・1930年代

1. 研究開始当初の背景

1960年代の日本において、政治、経済、思想、文化等々様々の領域に渉る〈戦後〉体制の再認、再検討が行われた。情報メディアの飛躍的な進展、東西対立を軸とする国際政治体制の固着と混乱、日本における大衆化社会

の拡大、ラディカリズムの高揚と破裂、サブカルチャーの隆盛と定着、等々その具体的な表徴は枚挙に暇がない。それらの事象について、政治史的な観点から言及する近年の成果としては、小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉 戦後日本のナショナリズムと公共性』（新曜社 2002）、糸圭秀実『LEFT ALONE—持続する

ニューレフトの「68年革命」(明石書店 2005)、北田暁大他編『カルチュラル・ポリティクス 1960/70』(せりか書房 2005)などがある。

しかし、文学史におけるその時期の展開も、〈戦後〉から現代に至る重要な転換点となったことを見逃すわけにはいかない。

渡部直己『かくも繊細なる横暴—日本「六八年」小説論』(講談社 2003)、芳川泰久『書くことの戦場—後藤明生・金井美恵子・古井由吉・中上健次』(早美出版社 2004)のような「1968年作家論」もあるが、少数の特権的な小説家の分析に限定された「文芸批評」にすぎない。近代日本における「文芸批評」というジャンルが、西欧において「哲学」が担ったようなオピニオンリーダーとしての役割を代替したことはつとに指摘される場所であるが、それが1970年代以降のいわゆる「近代文学の終焉」へと収束する決定的な契機は、1960年代における文学概念の変容にある。

今回の共同研究メンバーの多くは、1930年代の文学・思想についての集中的な共同研究を既に行っており、文学・思想懇話会編『近代の夢と知性—文学・思想の昭和一〇年前後—』(翰林書房 2000)を出版し大きな話題を呼んだ。その成果を現代的な問題へと接続するとき、60年代の文学・思想というテーマは不可避の階梯としてある。共同研究メンバーの多くは、2002年、韓国において〈戦後〉をテーマとした日本語文学についての国際的な研究会を開催(韓国日本文化学会との共催)し、その後も継続的に関連テーマで研究会を開くなど、今回のテーマに関する準備を既に進めており、30年代文学に関する研究以上の成果を十分に期待しうる体制が整っている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1960年代の思想研究・メディア研究・文化研究といった隣接する研究領域と30年代の問題とを接続することでしか見えてこない、新たな60年代文学論となることである。

本研究課題の特色は、文学をはじめとして、政治・思想・サブカルチャーといった多様な領域をも包摂することで、各個別ジャンル毎に研究されてきた日本の1960年代の知的言説の特質を複雑で多層的な諸関係の総体として共時的に究明する点、さらに1930年代と1960年代をさまざまな角度から対照させながら、文学概念の再検討を行う点にある。単線的な影響関係にとらわれず、相互参照的に1930年代の諸言説と1960年代のそれとの構造的な類似性と差異が抽出できるものと期待される。

しかしそうした試みは、1960年代の文学をその錯綜体において特権化するものではない。あるいは、多くの60年代論がそうであるように、世代論的に現代からレトロスペクティブに回顧するものでもないし、特権的に「1968年」を論じることでもない。60年代を経験していない世代による本研究は、そのような陥穽に陥ることなく、60年代の文学を成立させる物質的な条件をも明らかにする内容と射程を持っている。

60年代の文学を取り巻く出版ジャーナリズムやメディアに着目するのは全メンバーが共有する前提であり、純文学/大衆文学、カルチャー/サブカルチャー、文学/政治、事実/虚構といった60年代の文学をめぐる新たな線引きと錯綜した諸言説の再編の動きは、そのようなメディア論的な観点なくしては分析しえない。とりわけ60年代は、深沢七郎『風流夢譚』や大江健三郎『セヴンティーン』をめぐる筆禍事件、三島由紀夫『宴のあと』をめぐるモデル裁判など文学の自立性そのものが社会的に問われた時代であった。こうした問題系を1930年代に遡行して分析し、60年代の文学が何を構造的に反復していたのかという、戦前と戦後を貫通する近代日本の知的言説の臨界点も明らかにする。

3. 研究の方法

その転換を検証するにあたって、本研究が主に注目するのは次の二点である。

(1) 1930年代文学との反復と差異という観点からの検証。

例えば、左派文学運動の挫折と〈大衆〉を巡る論争を経由してロマン主義文学の復興と再評価が行われるという「文壇」内部の動向、また、この時期に盛んに交わされた〈政治と文学〉〈戦後文学〉〈純文学〉等々の論争で1930年代の文学・思想の動向が重要な参照項となったことなど、表層的な次元でも「1930年代文学」と「1960年代文学」の間に相似性は認められる。思想と文学とがそれぞれの領域を重ね合わせながら、先進性とアクチュアリティを持ち得た(と信じられた)時代として、1930年代文学は1960年代に浮上した。無論、異なる時代的条件下の文学・思想が、全く同形の軌跡を描いたと考えることはできない。むしろ、相似的な参照項は、そこに介在する差異をこそ明瞭にすべく働く。例えば、「ロマン主義」という問題が60年代に浮上するとき、そこには「遅れ」の意識が戦後世代固有のトラウマとして形成された(三島由紀夫、大江健三郎)。地勢学的な世界認識が問題となるとき、朝鮮半島、二つの中国、そしてベトナムを経由した60年代の文学は、既に「西欧とアジア」という単純な二項対立に逃避できず、戦後の占領期を

経て露見したナショナリティの「ねじれ」を常に直視せざるを得なかった。そしてなにより、テレビ、マンガをはじめとするポピュラーカルチャーの爆発的な広がりによって、「ハイカルチャー」としての文学の地位は、既にその根底を揺るがされていた。

(2) ポピュラーカルチャーの衝撃を文学・思想史の問題として捉え直すこと。

これが、二つめの着眼点である。現在、ポピュラーカルチャー研究は、文学研究による領土化を脱して固有の進歩を見せつつあるが、ポピュラーカルチャーが、文学がドミナントな言説としてあった文化状況に与えた衝撃をトータルに捉え直す試みは、未だないといってよい。とりわけ、60年代における文学概念の変容を、詩的言語の変質、ないし失速という観点から捉え直すことは重要である。70～80年代に全盛を迎えるポピュラーカルチャーの隆盛が、多くのコピーライター達によって牽引されていたことは疑えない。そこに見られたのは、「詩的言語のポストモダン化」とでもいうべき状況であったが、彼等コピーライターの中には、60年代に〈政治と文学〉という問題系に深くコミットし、そこから離脱した者達が多く含まれていた。

また、この時代、「近代文学研究」が学問分野の領域を確立し始めた時期であった(1965年『日本近代文学』創刊)ことに鑑みるならば、それは現在、研究対象として自明視されている文学概念を改めて問い直す試みともなる。

4. 研究成果

本研究課題の特色は、文学をはじめとして、政治・思想・サブカルチャーといった多様な領域をも包摂することで、各個別ジャンル毎に研究されてきた日本の1960年代の知的言説の特質を複雑で多層的な諸関係の総体として共時的に究明する点、さらに1930年代と1960年代をさまざまな角度から対照させながら、文学概念の再検討を行う点にある。単線的な影響関係にとらわれず、相互参照的に1930年代の諸言説と1960年代のそれとの構造的な類似性と差異を抽出し、思想的、メディア論的な文脈を視野に収めつつ、これらの事件における30年代/60年代の差異と反復を辿ることで、政治・文学・メディアの相関の具体相とその通時的変容を明らかにすることが可能となる。

このような本研究課題に基本的な展望をもたらすための合意事項、方法論を確認した上で、各研究分担者がこれまでの1930年代の文学研究の成果を参照枠としながら、60年代の文学が何を構造的に反復しつつ、80年代の文学終焉言説を準備したのかを通時的に明らかにすると同時に、80年代の文学が他の

ジャンルとどのように葛藤しながら変容していったのかを共時的にとらえることができた。

平成20年度は、第1回会合として、8月27日、東北大学において研究報告会を、同月28日、山形国際交流プラザにおいて、ドキュメンタリー映画上映、及びそれに関わる討論会を開催した。時代と直接に関わりを持ったメディアとしてのドキュメンタリー映画を実見し、それに学びながら今後の研究計画全体のデザインについて認識を共有した。第2回会合として、北海道大学において2月28日、3月1日の両日にわたって、各自の研究経過を報告し合い、来年度の台湾におけるシンポジウムに向けて準備を行った。

平成21年度は、初年度の研究成果を踏まえて、研究を推進していった。その一つの研究成果として、8月19、20の両日にわたって、「日本近代文学とサブカルチャーの境界」と題して、台湾の輔仁大学でシンポジウムを共催した。本研究課題は、1960年代の日本の文学をめぐる言説を、アジア、在日、戦争、ポスト植民地主義といった問題系と1930年代のファシズムと植民地主義の時代の文学をめぐる言説と接続させることで、ナショナリズムの観念を再検討し、近代国民国家の枠組みの内部で行われてきた近代の文学・文化研究の限界を解消することも目指しており、その研究成果をアジアに向けて発信することは有意義な試みであった。

最終年度である平成22年度は、多くの成果をまとめる総括的な研究の段階に至る。前年度のシンポジウムを中心とした成果を踏まえて、成果報告の最終的な検討と点検、全体の総括を兼ねて、8月27日、北海道大学において第3回会合を開催した。

最終的な成果は、研究成果報告書にまとめられ、紙媒体として刊行した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計14件)

①高橋秀太郎、『図書新聞』の1950年代—思想／出版文化／マス・コミュニケーション—、東北工業大学紀要Ⅱ・人文社会科学編、査読無、31号、2011、91—101

②押野武志、半自伝的青春小説の方法—『青葉繁れる』と『花石物語』、国文学 解釈と鑑賞、査読無、76巻2号、2010、136—141

③畑中健二、三木清—板垣直子の剽窃論争とその周辺 付・板垣直子著作目録、武蔵大学人文学会雑誌、査読有、42巻1号、2010、1—45

④土屋忍、平和運動家としての松尾邦之助—ユネスコ加入・ペンクラブ再建—、彷徨月刊、

査読無、通巻 295 号、2010、14—16

⑤土屋忍、個人的散文の物語性、歴史性、社会性—清岡卓行「アカシヤの大連」論、武蔵野日本文学、査読無、20号、2010、56—73

⑥高橋秀太郎、信と歓喜—昭和15年の善蔵とメロニー、季刊 iichiko、査読無、107号、2010、32—43

⑦高橋秀太郎、太宰治の「ロマンチズム」—否定・憧憬・受容—、東北工業大学紀要(人文社会科学編)、査読無、30号、2010、1—12

⑧押野武志、フラット文学論序説、日本近代文学、査読有、80集、2009、217—223

⑨押野武志、贈与と交換のエコノミー—「貝の火」論、国文学 解釈と鑑賞、査読無、74巻6号、2009、117—120

⑩野坂昭雄、六〇年代の三島由紀夫—『美しい星』から『豊饒の海』へ—、原爆文学研究、査読無、8号、2009、40—49

⑪山崎義光、純文学論争、SF映画・小説と三島由紀夫『美しい星』、原爆文学研究、査読無、8号、2009、50—68

⑫土屋忍、太宰治「乞食学生」の嘘—学生服の〈酔詩人〉とカルピスを飲む〈小説家〉—、武蔵野日本文学、査読無、18号、2009、58—68

⑬山崎義光、『金閣寺』から『美しい星』へ、三島由紀夫研究、査読無、6号、2008、125—136

⑭野坂昭雄、林京子「長い時間をかけた人間の経験」論、原爆文学研究、査読無、第7号、2008、41—56

〔学会発表〕(計20件)

①土屋忍、故郷の文学／文学の故郷、西東京市高齢者大学、2011年1月19日、西東京市富士町福祉会館

②土屋忍 日本文学の中のバリ島、インドネシア・韓国・日本 共同セミナー、2011年1月5日、インドネシア大学(ジャカルタ)

③森岡卓司、フィクションとアイロニー —村上春樹「1973年のピンボール」試論、日本近代文学会東北支部冬季大会、2010年12月25日、山形テルサ(山形市)

④高橋秀太郎、山岸外史と山形、日本近代文学会東北支部冬季大会、2010年12月25日、山形テルサ(山形市)

⑤山崎義光、疎外による超越の臨界点—三島由紀夫『美しい星』と大江健三郎『ピンチランナー調書』、昭和文学会秋季大会、2010年11月13日、法政大学市ヶ谷キャンパス

⑥土屋忍「武蔵野」と文学、武蔵野地域自由大学における講演、2010年11月9日、武蔵野地域自由大学交流センター(武蔵野市)

⑦野口哲也、近代文学(研究)と民俗学、第25回鳴門教育大学国語教育学会、2010年8月24日、鳴門教育大学(鳴門市)

⑧森岡卓司、マラーノとしてのテキスト —伊集院静と〈戦後〉日本の地政学、比較文学会東北支部第8回比較文学研究会、2010年7

月31日、仙台市青年文化センター

⑨野坂昭雄、丸山薫の戦争詩と視覚、日本文芸研究会第62回研究発表大会、2010年6月20日、福島大学(福島市)

⑩畑中健二、思想への数理的アプローチと日本思想史、日本文芸研究会第62回研究発表大会、2010年6月19日、福島大学(福島市)

⑪土屋忍、金子光晴と〈武蔵野〉、武蔵野市寄附講座における講演、2010年4月26日、武蔵野大学(武蔵野市)

⑫森岡卓司、日本を語る日本語の地政学 —東アジア・日本・アメリカ—、シンポジウム「共振する東アジア 現代東アジアの文学交流」、2010年2月20日、山形大学(山形市)

⑬野坂昭雄、60年代の三島由紀夫—『美しい星』から『豊饒の海』へ—、シンポジウム「日本近代文学とサブカルチャーの境界」、2009年8月20日、輔仁大学(台北市)

⑭山崎義光、純文学論争、SF映画・小説と三島由紀夫『美しい星』、シンポジウム「日本近代文学とサブカルチャーの境界」、2009年8月20日、輔仁大学(台北市)

⑮押野武志、パロディとしての現代ミステリ、Association for Japanese Literary Studies、2008年8月21日、ブリティッシュ・コロンビア大学(ヴァンクーバー)

⑯野坂昭雄、心霊学というメディアと近代詩、Association for Japanese Literary Studies、2008年8月21日、ブリティッシュ・コロンビア大学(ヴァンクーバー)

⑰森岡卓司、足痕の消し方 —「手記」としての『痴人の愛』—、様式史研究会第50回研究発表会、2008年7月27日、山形大学(山形市)

⑱高橋秀太郎、太宰治とボードレール、様式史研究会第50回研究発表会、2008年7月27日、山形大学(山形市)

⑲畑中健二、富士谷御杖における倫理的構想力、表象文化論学会、2008年7月6日、東京大学駒場キャンパス

⑳野坂昭雄、林京子と第三次原爆文学論争、原爆文学研究会、2008年6月7日、活水女子大学東山手キャンパス(長崎市)

〔図書〕(計5件)

①土屋忍、他、武蔵野大学出版会、武蔵野の記憶と現在—日本語・日本文学科からの第2信—、2010、841(791—841)

②森岡卓司、他、ハルビン工業大学人文社会科学学院、ハルビン工業大学人文学院日本山形大学日文学部学術交流会論文集、2010、96(90—96)

③土屋忍、他、柏書房、松尾邦之助 長期滞在者の異文化体験、2010、841(50)

④押野武志、翰林書房、文学の権能—漱石・賢治・安吾の系譜、2009、285

⑤押野武志、他、玉川大学出版部、ヴィジュ

アル・クリティシズム、2008、345 (23-51)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

押野 武志 (OSHINO TAKESHI)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：70270030

(2) 研究分担者

畑中 健二 (HATANAKA KENJI)
東京工業大学・社会理工学研究所・助教
研究者番号：30334551
土屋 忍 (TSUCHIYA SHINOBU)
武蔵野大学・文学部・准教授
研究者番号：20302200
山崎 義光 (YAMAZAKI YOSHIMITSU)
大阪府立工業高等専門学校・総合工学システム学科・准教授
研究者番号：10311044
野坂 昭雄 (NOSAKA AKIO)
大分県立芸術文化短期大学・国際文化学科・准教授
研究者番号：20331936
森岡 卓司 (MORIOKA TAKASHI)
山形大学・人文学部・准教授
研究者番号：70369289
高橋 秀太郎 (TAKAHASHI SYUTARO)
東北工業大学・共通教育センター・講師
研究者番号：40513065
野口 哲也 (NOGUCHI TETSUYA)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・講師
研究者番号：90533000

(3) 連携研究者

なし